

昏がりりで、月を見上げる



垂れ籠める 影を滋養に 育つ竹 いつか孕んだ 毒の結晶
みどりごは 朔を選んで 地に降りた 午睡に暮れて 宵闇を待つ

迷い人 深山を歩き 魅入られる 影を従え 育つ毒花
ちりぢりに 乱れた恋慕で こい願う すがりつく手は 凍り砕けた

ふれられぬ 花をめとった 物狂い 嗤う縁者の 声も聞こえず
こころない 妻と共寝を 夢に見て ついにしとねで 細氷と化す

弔問の 客の好奇に ほほえんで 花のおとめが 毒をふりまく
毒を吸い 夢見心地で 身を投げて やがて都は 野草に沈む

ひとが消え 刈り取るものが いない国 ゆるりゆるりと 茂る深緑
木々の影 昼と夜との 境なく やすらぎを得て 花はまどろむ

まどろみを さえぎる声に 身を起こす 昏い寝床は しんと冷たい
霜をふみ おとなう楡の 立つ場所の 朽ちた石碑に 亡き夫の名

春はなく 夏も冷たい 影の国 老い行く秋と やすらぎの冬
深くなる 広がる木々の その向こう なつかしい声 空耳の夜

胸の奥 ゆっくりと咲く 熱の花 影の毒すら 凌駕する花
苦しさに かきむしるのど なぜた指 遠い夫の ぬくもりの熱

一度だけ ふれた夫の あたたかさ いのちをうばった 夫のぬくもり
弔いと せめてあかりを 灯しても 深山の影が それを許さず

影の森 静かな毒に 冷える森 胸に抱えた 身を焦がす熱
緩慢に 娘の胸を 溶かし行く 記憶の伴侶 手遅れの恋

溶けて行く すべてが溶けて 消え失せる 胸も手足も 苦痛とともに
闇のなか 最後に輝く 凍り花 焦がれ焦がされ 恋に殺さる

毒の影 そこから生まれた ものもいた いまは深山に 生くるものなし
彼の娘 絶えた石碑の そのまえに 竹の新芽が 顔をのぞかす